
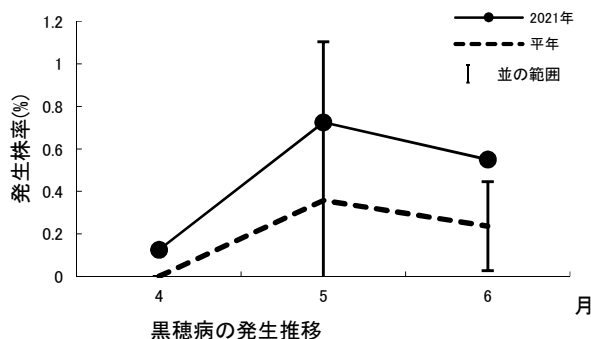


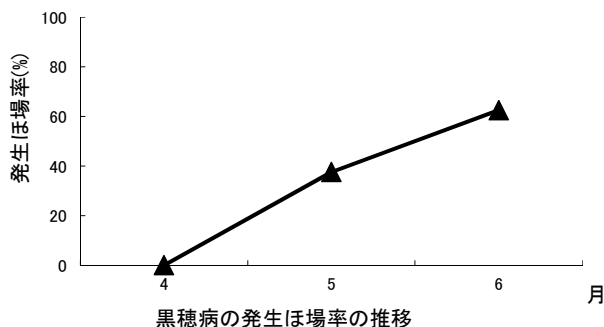
作物	さとうきび		地域	宮古群島
病害虫名	黒穂病			
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	やや多		
予報	6 月からの増減傾向	—		
	7 月の発生量 (平年比)	—		
予報の根拠				

調査結果

今期と平年の推移



発生ほ場率の推移 (2020年)



・ 黒穂病発生ほ場率 : 40.0% (平年値 : 17.9%)

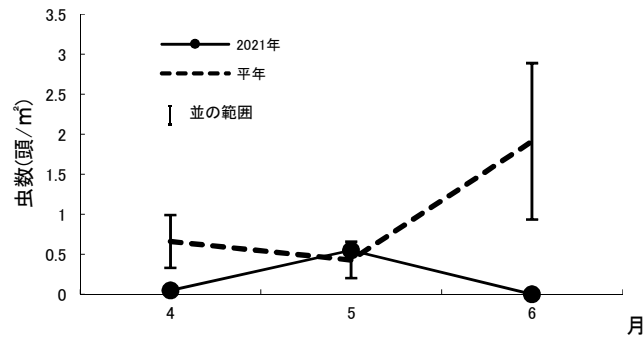
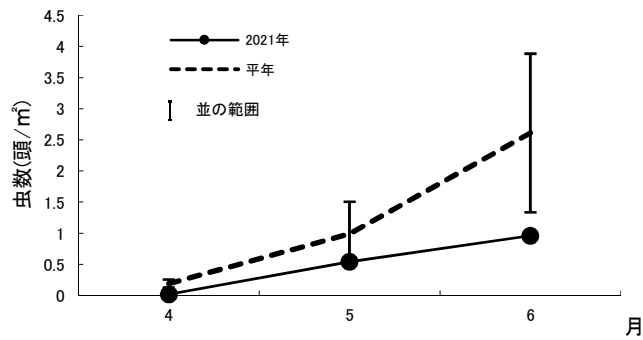
防除のポイント

- ・ 発生は4月頃から見られ、6~8月に多くなる。
- ・ 胞子の飛散を防ぐため、できるだけ鞭状体出現前に抜き取り処分する。
- ・ 発病ほ場やその隣接地から採苗しない。

作物	さとうきび	地域	宮古群島
病害虫名	バッタ類		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	やや少	
予報	6 月からの増減傾向	—	
	7 月の発生量 (平年比)	—	
予報の根拠			

調査結果


今期と平年の推移



・発生種：台湾ツチイナゴ

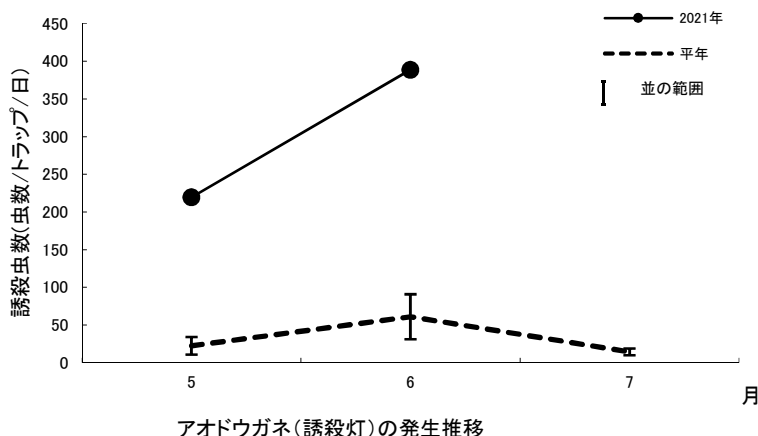
防除のポイント

- ・発生源となるほ場及び周辺のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ・幼虫期の防除が効果的なので、ほ場周辺の見回りを行い幼虫の早期発見・防除に努める。

作物	さとうきび		地域	宮古群島
病害虫名	アオドウガネ			
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	多		
予報	6 月からの増減傾向	↓		
	7 月の発生量 (平年比)	多		
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)		


調査結果

トラップ調査 (アオドウガネ成虫)



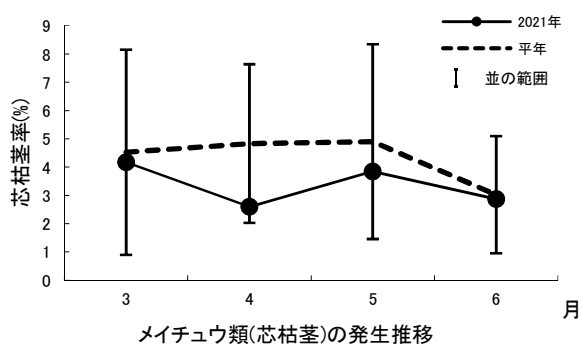
防除のポイント

- ・サトウキビにおけるアオドウガネ被害は、土壌に生息する幼虫食害により、収穫期の立枯による減収や株出不萌芽の原因となる。成虫は5～7月に出現し、その後サトウキビなどイネ科植物の地下部に産卵する。
- ・成虫発生時期の誘殺灯による大量誘殺、6～10月の幼虫若齢期に薬剤による防除を実施する。

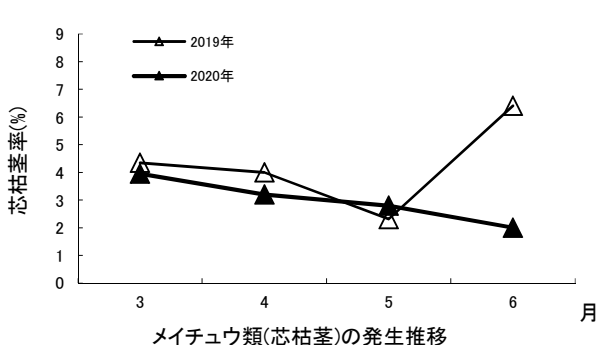
作物	さとうきび	地域	宮古群島	
病害虫名	メイチュウ類(カンシャシクイハマキ・イネヨトウ)			
調査結果	6 月の発生量 (平年比)			並
予報	6 月からの増減傾向			—
		7 月の発生量 (平年比)	—	
予報の根拠				

調査結果

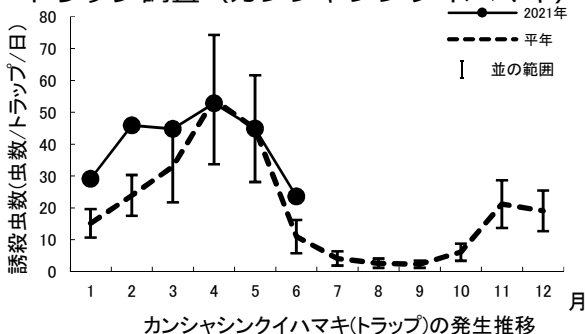
今期と平年の推移



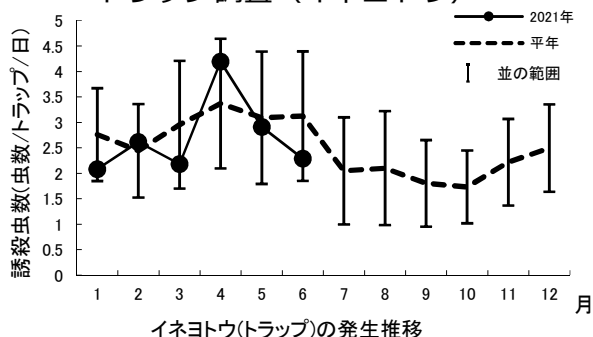
過去 2 年の推移



トラップ調査 (カンシャシクイハマキ)




トラップ調査 (イネヨトウ)



- ・ 芯枯れ発生ほ場率：75.0% (平年値：77.4%)
- ・ 茎内で発見したメイチュウ類のうち、100% (2/2頭) がカンシャシクイハマキ、0%(0/2頭)がイネヨトウであった。

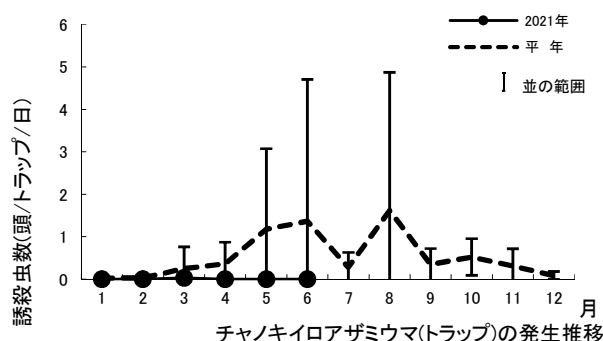
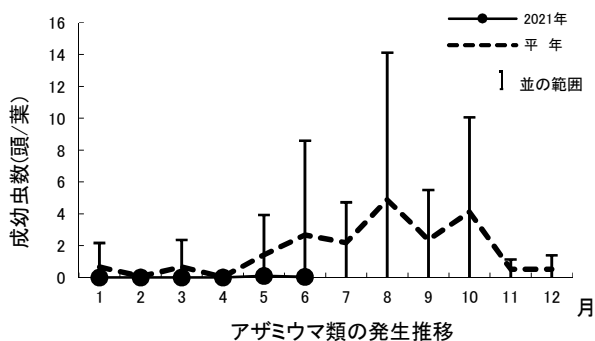
防除のポイント

- ・ ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- ・ 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ・ ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- ・ 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- ・ 植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

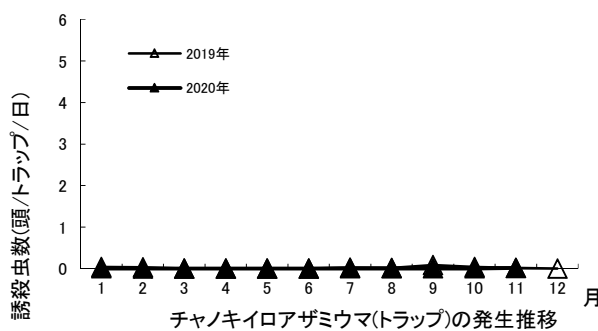
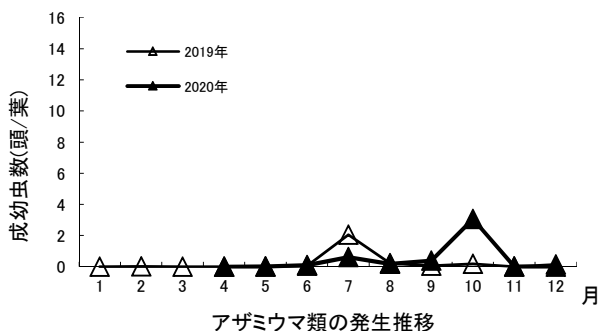
作物	マンゴー	地域	宮古群島
病害虫名	① チャノキイロアザミウマ		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報	6 月からの増減傾向	↓	
		7 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)	

調査結果

今年と平年の推移



過去2年間の推移




・見取り調査による発生施設率：20.0%（平年値：52.3%）

防除のポイント

- ・ 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
- ・ 収穫期に発生の多かった施設では、せん定終了後に薬剤による防除を行う。
- ・ コミカンソウ類など、発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ・ 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

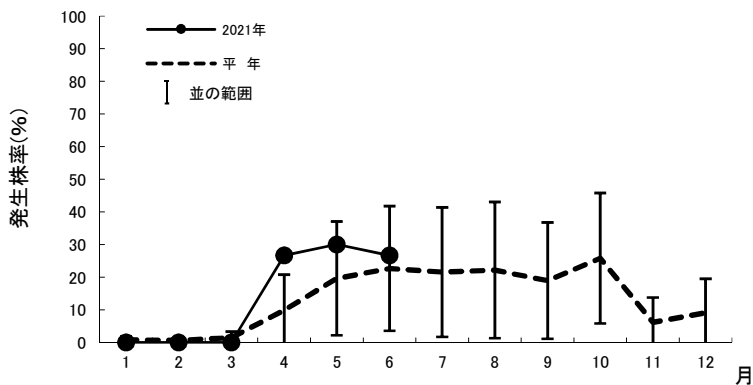


ナガエコミカンソウ

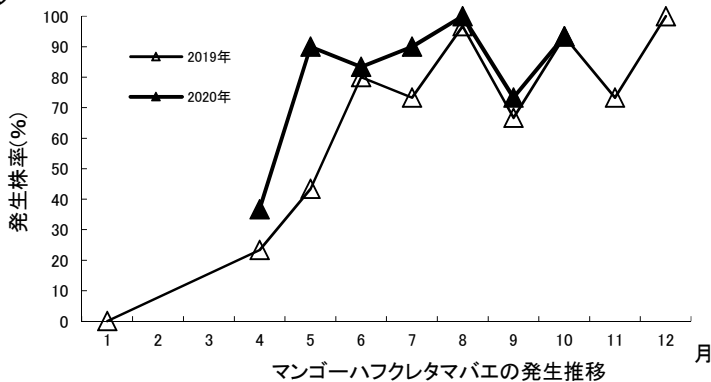
作物	マンゴー	地域	宮古群島
病害虫名	マンゴーハフクレタマバエ		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報	6 月からの増減傾向	→	
	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (→)	

調査結果

今年と平年の推移




過去2年間の推移



・発生施設率：60% (平年値：41.9%)

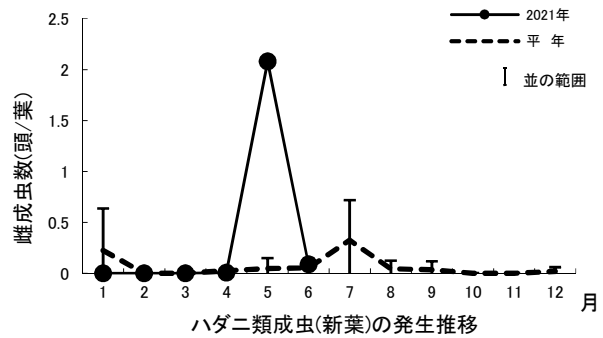
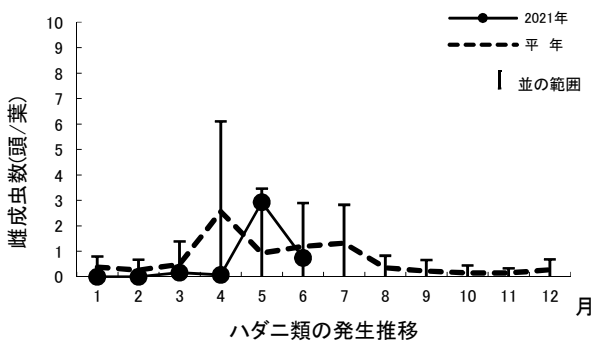
防除のポイント

- ・ 幼虫は、新葉から新梢の軸までの柔らかい組織内に潜行して食害し、成熟すると飛び出し、地面に落下して蛹化する。
- ・ 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。

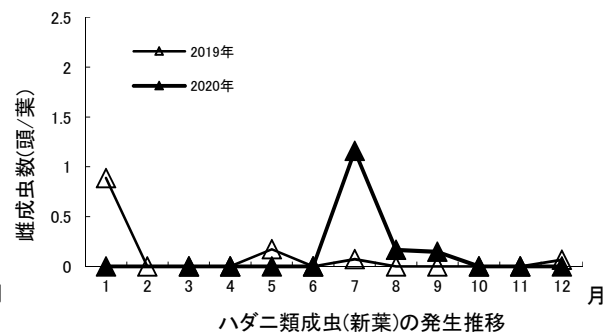
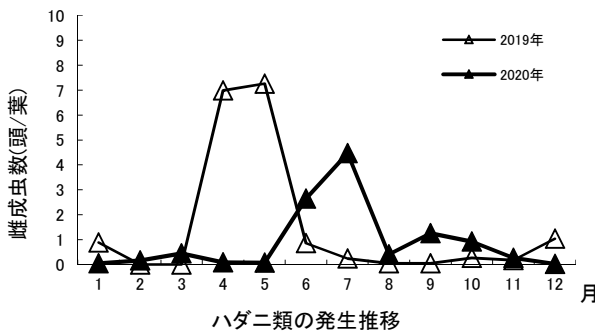
作物	マンゴー	地域	宮古群島
病害虫名	② ハダニ類		 <p>シュレイツメハダニ</p>
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報	6 月からの増減傾向	↗	
		7 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果

今年と平年の推移



過去2年の推移




- ・発生種：シュレイツメハダニ
- ・発生施設率：100% (平年値：34.0%)

防除のポイント

- ・収穫終了後の防除を徹底する。
- ・薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

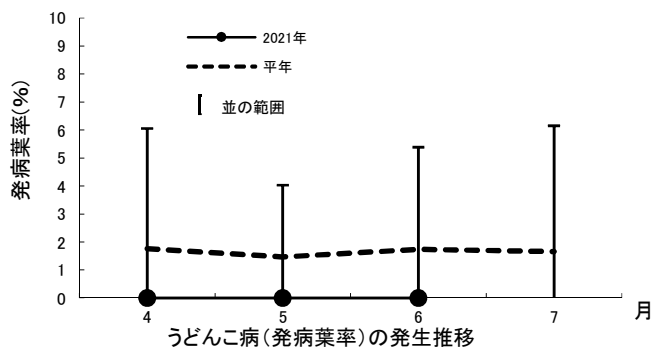


ハダニの寄生による葉のかすれ症

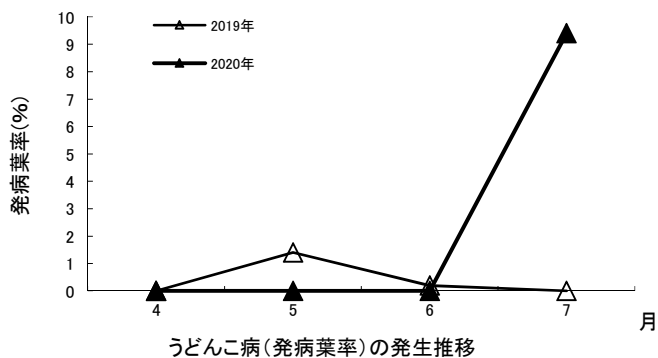
作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	うどんこ病		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並	
予報	6 月からの増減傾向	→	
		7 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (→)	

調査結果

今期と平年の推移




過去 2 年間の推移



発生ほ場率 : 0% (平年値 : 13.2%)

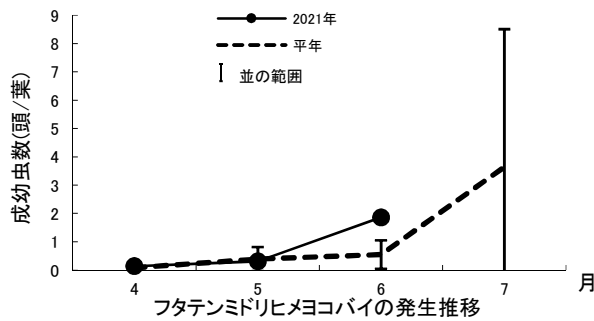
防除のポイント

- ・ 下位の罹病株や残葉は速やかに除去し、風通しを良くする。
- ・ 窒素過多にならないようにする。
- ・ 草勢を維持し、適切な施肥管理を行う。

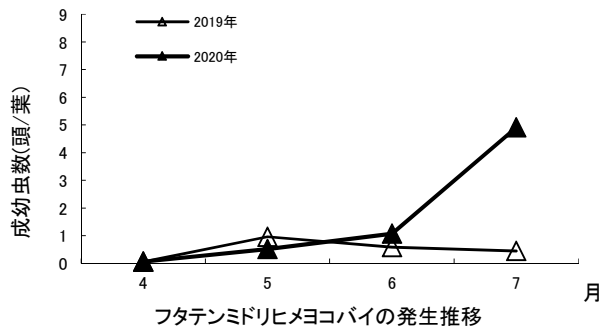
作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	① フタテンミドリヒメヨコバイ		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	やや多	
予報	6 月からの増減傾向	↗	
	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↗)	

調査結果

今期と平年の推移




過去 2 年間の推移



発生ほ場率 : 80.0% (平年値 : 68.4%)

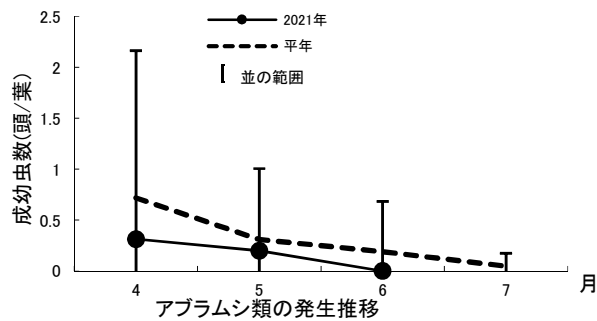
防除のポイント

- ・多発すると被害葉は黄変萎縮するので、葉裏を観察し、早期発見・防除に努める。

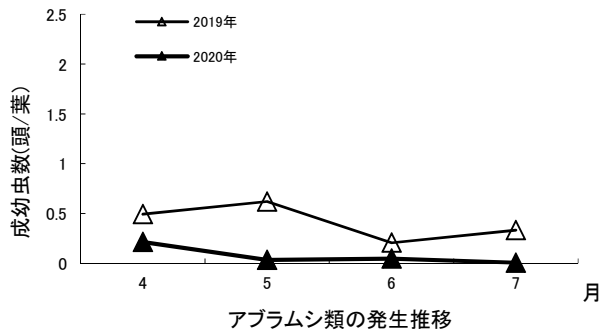
作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	アブラムシ類		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	(発生なし)並	
予報	6 月からの増減傾向	↓	
		7 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↓)	

調査結果

今期と平年の推移




過去 2 年間の推移



発生ほ場率 : 0 % (平年値 : 26.3%)

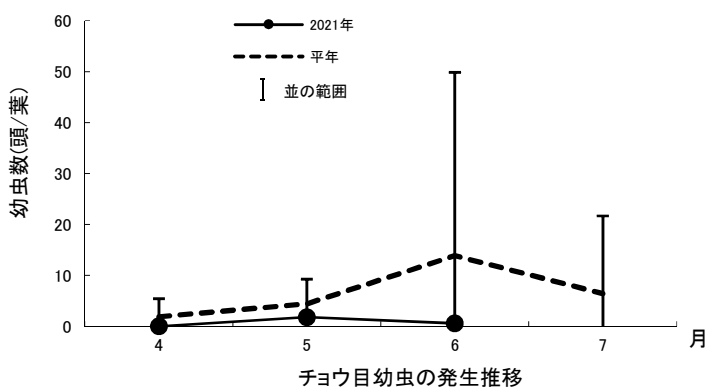
防除のポイント

- ・多発すると新葉の萎縮や芯止まりにより生長が阻害されるため、葉裏をよく観察し、早期発見防除に努める。
- ・発生源となるほ場内外の雑草を除去する。

作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	② チョウ目幼虫(オオタバコガを除く)		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報	6 月からの増減傾向	↘	
	7 月の発生量 (平年比)	並	
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	

調査結果

今期と平年の推移

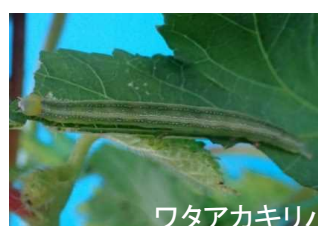


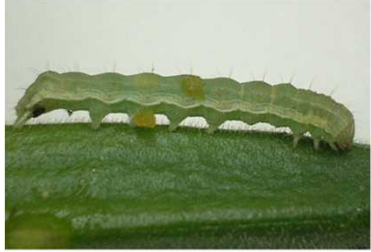
発生ほ場率：20.0% (平年値：39.5%)

発生種：シロイチモジヨトウ

防除のポイント

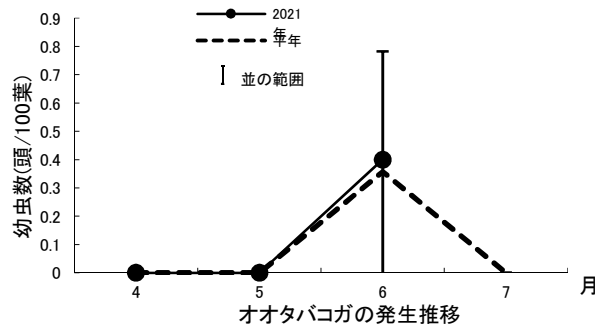
- ・発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・葉裏の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。



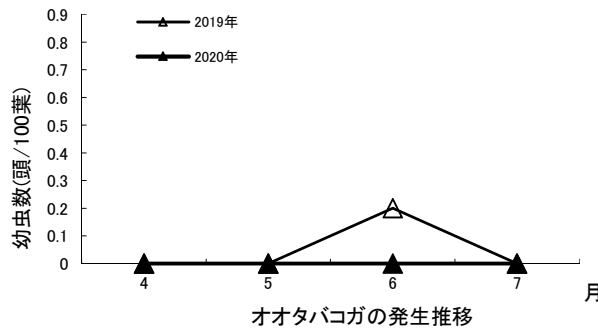
作物	オクラ	地域	宮古群島
病害虫名	③ オオタバコガ		
調査結果	6 月の発生量 (平年比)	並	
予報	6 月からの増減傾向	↘	
		7 月の発生量 (平年比)	並
予報の根拠		平年の発生量の推移 (↘)	

調査結果

今期と平年の推移



過去 2 年間の推移



防除のポイント

- ・ 発生密度が低い場合は、捕殺が有効である。
- ・ 葉裏の幼虫に対しては薬剤効果が低減するので、若齢幼虫期のかすり状被害を発見したら、速やかに薬剤を散布する。
- ・ 被害果や摘芯、摘花した腋芽・花蕾等の残さは、ほ場外へ持ち出し適切に処分する。